



小學
用科
日本文典

春山弟彦著

卷之一
卷之二
上

卷之二之目錄			卷之一之目錄							
代名詞	形容詞	名詞	詞法	延言約言畧言	音便通音	綴字	呼法	音韻文字	字法	緒言
左二十三	右十三	左二		左二十	左十五	右十一	右七	左二	左二	

木 2
4671
1



4671
1

春山第彦著

小學
科用
日本文典

明治十年
二月十三日
版權免許
龍章堂發兌



春山第壹卷

小學科用 日本文典

明治十年
二月十二日

版權免許 龍章堂發行





小學用 日本文典卷之一

明治七年八月十日 寄贈



姫路 春山弟彦 著



433
3
卷

緒言

語學は何の為め設くる

我日本國同言種の人とつへと山河をへどて

境界をわつづゝ志あるがひて土音^{イナカゴト}方言^バのさゝら

訛^{ウニナマリ}謠^リなきことを得どきを口語^{ハサシ}(談話)とみたり

筆語^{カキトリ}(文章)より其述ぶる所をこゝくあがひ

りてこを一方に解るも他方に通じがと

きこと有るを苦む今其憂を避むとて語音を

日本文典 卷一

つらとめ章句をとゞつとめて其文を同トく
せしめん為め説くろ學を至

問 口語筆語とは

答 人の心より所の事情とを他の人へ告むと
をる時け聲音と幾し言詞と綴り談話と述べて
思ふ所を達せしむこれを口語といふ又其口語
を字(音聲の符號)と寫し文と作る者これを筆語
といふなり

問 語學は共し幾類に分つ

答 三類あり一は字法二は詞法三は句法これなり
問 字法とは

答 人の音聲と各異の符號を設け符號ととりて音

聲を描き出を者これを字と名づく其字ととり
て言詞を綴ること示め以法をいふなり

問 詞法とは

答 聲音一個或は數個を疊ねて一義をなを者こと
を詞と名づく其詞の品種性質活用等を示めを
法なり

問 句法とは

答 二個以上數個の詞を組織して事を紀し意趣を
述べて説話をかきつらはを者ことまを句と名づ
く其句の體裁及び詞の配合を示めを法なり

字法

問 字法とは

答 音韻文字呼法綴字通音音便延言約言略言等の

法を示めしめて文字の讀法及び用格を知らしむ

る法なり

音韻文字

問 音韻は共々幾種に分つ

答 清音濁音半濁音鼻音拗音の五種となし其清音

は母韻子韻は濁音より下四種はみち子韻

なり

問 清音は幾音より幾字か

答 五十音より四十七字なり五十音圖をみると

五十音圖

ア行	ア	イ	ウ	エ	オ	母韻
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ	上腭音
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ	齒音
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト	齒音
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	帶鼻音
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	唇音
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ	唇音
ヤ行	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	二重母韻
	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	

ラ行	ワ行
ラ	ワ
リ	キ
ル	ウ
レ	エ
ロ	ヲ
上腭音	二重母韻

濁音は

問 濁音は

答 二十音有りて別々字を作らば清音の字を用ふ
又(ッ)の符號を加へてこれを識別すること有り
濁音圖をみよ

濁音圖

カ行	サ行
ガ	ザ
キ	ジ
ク	ズ
ゲ	ゼ
ゴ	ゾ
上腭音	齒音

タ行	ハ行
ダ	バ
チ	ビ
ツ	ブ
ヂ	ベ
ド	ボ
齒音	唇音

問

半濁音は

答 十音有りて別々字を製らば清音の字を用ふ又
(ッ)の符號を加へてこれを識別すること有り半
濁音圖をみよ

半濁音圖

カ行	ハ行
カ	ハ
キ	ヒ
ク	フ
ケ	ペ
コ	ホ
上腭音	唇音

問 鼻音ハ

答 ンの一音なりランケンテン等のンよして詞の上ニ在ることなり

問 拗音ハ

答 二重母韻を他の子韻と合せて急ニ呼ぶ時生むる音なりこれハ他の音の如く單一の音よりらびして重複の音なりチヤニユチヨクワクエスキ等の如く外國より傳來せる者多ク

問 母韻トハ

答 元來聲といふことよりして唇齒を用ゐるを以て出る音を以てア行の五音なり又二重母韻とい

ふ者ありヤ行ワ行の十音なりときは母韻の重りたる者よりして假令はヤはイアエアの合音ワはウアオアの合音なり如くして其他の諸音は必是ア行の音の唇齒腭鼻等ニ觸れて轉化ト

問 子韻トハ

答 元來響といふことよりして母韻を借りて唇齒の上腭を以て聲と共に響く音なり本邦單子韻の字を製らむ其母韻ニ配合して全き聲を以て就きて字を製る故に今より其配合音の者を以て子韻と名づけて母韻とわたり

問 子韻は幾種に分つ

答 三種とを一ニ唇音ニニ齒音三ニ上腭音トトて

この外ニ鼻音トリ其唇齒腭鼻トソヘラも全き

唇齒腭鼻トリトテ實は唇齒腭鼻の音を帶

ひて母韻と共に響く音を至故トトを長く引

きて呼へバカチラを母韻ト歸をラナリ假令は

ア列の音を引きて呼へはミチアの音ト歸トイ

列の音はミチイの音ト歸をラを以て知る也ト

唇音トけ

問 唇音トけ

答 ハ行の清音五個其濁音五個半濁音五個マ行の
五音共ニ二十音なり

問 齒音トけ

答 廿行の清音五個其濁音五個ハ行の清音五個其

濁音五個共ニ二十音なり

上腭音トけ

問 上腭音トけ

答 カ行の清音五個其濁音五個半濁音五個ラ行の
五音共ニ二十音なり

帶鼻音トけ

問 帶鼻音トけ

答 ナ行の五音なり

問 音はトべて幾個トトて字をトべて幾個トトヤ

答 單音は八十一トトて其字ハ僅ニ四十八個なり
拗音は字を製ラ以數を定めト又合音字トリ支

那字にり

合音字とは

メシテコトキトキトモ云イフト

イフ等の七字なり

支那字とは

彼國より来る所の文字にして一物一事みを字

を製を其數萬を以て算を然して我が言語文章

大半其字を挿入を其習慣の因て来ること久し

又其字を用る譯を施して用るあり本音の如

、マ用るにりををハチ松マツ竹タケ梅ウメ智

チ仁シン勇ユウの如し

呼法

問 呼法とは

答 長呼短呼疊音四聲等の名稱を立て諸音の呼法

を分つをハチを

問 長呼とは

答 聲を長く引きて呼ぶ音にして母韻をかぎれり

さてと色(一)の符號を徴をるをり假令はア

イウイ等の如し又子韻は長く引をばおのづ

ら母韻を歸して呼ばるをりサアキイシ

イイ等の如し此のなり鼻音のンは其ま、長

く引くことを得るをりアンカー等の如し

問 短呼とは

音をつめて急促し呼ぶ時或ハ意をつとめんと
して力をこめて呼ぶ時ハ聲の口中より外
に出ざる者にして單直ニ短きニは何れなり
急促しつまる音なりバ實は促呼といひて然る
可き者なりこそら音ニは(シ)の符を用ること
あり

問 答

はトめの者ニ屬するは
キの音をつめてつふはヒキ、リ引切をヒッキ
リヒの音をつめてつふはイヒテ言テをイツテシ
タガヒテ從テをシタガッテフ音をつめてつふは

問 答

タフトシ貴シをタフトシチの音をつめてつふは
モチテ以テをモッテタチテ立テをタッテツの音を
つめてつふはヤッコ奴をヤッコリをつめてつふ
はホリス欲スをホッスカヘリテ返テをカヘッテと
つふ類あり

第二の者ニ屬するは

マタク全クをマッタクモトモ最をモットモビチユ
ウ備中をヒッチユウハトリ服部をハットリとつへ
る類しして力をこめてつふ時ニ第一音と第二
音との間ニ口内音の更ニ加はりて急促し呼ば
る、者なり

三聲表

の み 飲	つ る 弦	は し 橋	と ち 立	よ 世	か し 片	と 戸	は し 履	い る 射	平 聲
の み 蚤	つ る 鈎	は し 端	と ち 太刀	よ 夜	か し 象	と 外	は し 掃	い る 入	上 聲
の み 鑿	つ る 鶴	は し 箸	と ち 館	よ 節	か し 肩	と 砥	は し 吐	い る 煎	去 聲

お ひ 連	ね 寢	つき 月	あ ら 嶽	よ ろ 絢	か み 神	か き 垣	と き 解	は 羽	平 聲
お ひ 生	ね 音	つき 盡	あ ら 竹	よ ろ 依	か み 歌	か き 柿	と き 時	は 葉	上 聲
お ひ 爰	ね 根	つき 搗	あ ら 閑	よ ろ 夜	か み 上	か き 蠣	と き 疾	は 齒	去 聲

お き 置	け 毛	こ ひ 戀	け き 飽	け き 蓄	ゆ ふ 夕	め 眼	み 三	も 里 社
お き 沖	け 蹴	こ ひ 乞	け き 明	け き 足	ゆ ふ 結	め 女	み 見	も 里 威
お き 起	け 氣	こ ひ 鯉	け き 秋	け き 惡	ゆ ふ 木綿	め 芽	み 身	も 里 守

あ き 卷	ふ き 拭	け つ 厚	さ き 咲	さ け 鮭	ゆ き 往	ひ 干	ひ 日	あ き 住
あ き 楨	ふ き 露	け つ 充	さ き 崎	さ け 酒	ゆ き 雪	ひ 晝	ひ 楸	あ き 墨
あ き 蔚	ふ き 吹	け つ 暑	さ き 裂	さ け 避	ゆ き 齋	ひ 蛭	ひ 火	あ き 隅

問 三聲はつねに表の如く一定して變むることな

きう

答 上下のつゞきよりて平聲とちまち去聲と變

ト上聲かへりて平聲かはること常なり前問

答とるが如くひ日は平聲ひ槌は上聲ひ火は

去聲なるをひかげ日影といふ時のひ日ハ上聲

かゝひ懸槌といふ時のひ槌は去聲ひば火箸

といふ時のひ火は上聲とちるなり

問 入聲とは

答 短促の呼ぶ聲よりてをまハち前よりふ所の短

呼なりこれより聲の昂低りて實は平上去の

三聲よりわらつ可きはづまども其音つまりて

分明より難き故にわらくをめてひとつと入聲
と名つけしなり

綴字

問 綴字とは

答 二個以上數音をくみわはせとる詞を唱ふる時

上下のつゞけぶらりたりて口調よりとかひ異

音を發する者なり然るを字よりつりて詞を綴

るは其發音のまゝとち多かはりて正しく

本音の字を以て綴るを法とし又二音のはなを

と近くして後世よりとりて相混といふ口語

分ち難きもこれを古と徴して各異の本音を
可き者あり此二件の者を正して言詞を連綴
をををかまづらひ綴字法といふなり

相ちかき音とは

問

イハ或ハエエ或ハオヲ等を至古は音聲正しく
かまづかひも能く定まりて苟も乱るゝこと無

かりしを今は混していひ分ち難々れ其りみ

の書と徴して多し定むるなり

問

濁音の相混トとる者は
ヂジとヅズとちり是うちジズは少くして多く
セチツを至又口調と至て濁音とる者は其

答

清音を知りてこまをみつ可し

問

つゞけがらと至て口調とる多がひ異音と轉
る者とは

答

これ二様あり一は詞の頭とら至て轉がる者一
は詞の腰脚とありて異音とうつる者なり

問

はトめの者は
ア列の音をオ列の音の如く呼ぶ者十個なり又

答

エ列の音を拗音と呼ぶ者なり

問

其一は
アの音をオの如く呼ぶ者なり
ハの音をフウの音の前とありて

答

其フウをオの如く呼ぶ時上の音が轉むるなり
下みを同ト今と實は正しく呼ぶものとソへ
はあらびオウの間
音を發する者なり

問 其二は
答 カの音をコ甲賀の如く呼ぶ者なり
カか

問 其三は
答 ウうの音をコ神戸の如く呼ぶ者なり
ウか

問 其四は
答 サ草紙の音をソ相馬の如く呼ぶ者なり
サさ

問 其五は
答 タたの音をト貴の如く呼ぶ者なり
タた

うめ專等の如く

問 其五ハ
答 ナ南畝の音をノ直會の如く呼ぶ者なり
ナな

問 其六は
答 ハはの音をホ匍匐の如く呼ぶ者なり
ハは

むる祝部 奠ははふ祝部 等の如く

問 其七は
答 マまの音をモ告白の如く呼ぶ者なり
マま

問 其八は
答 ウうの音をウ望の如く呼ぶ者なり
ウう

答 ヤの音をヨの如く呼ぶ者をミ ヤウかのひハ

日 ヤウとく漸等の如く

問 其九は

答 ラの音を口の如く呼ぶ者なり ことは支那字音

まとは外國の詞とのみりて本邦の詞とはふ

ラウ老らふ蠟等の如く

問 其十は

答 ヲの音をヲの如く呼ぶ者なり ことは外國の詞

とのみありて本邦の詞とは一もふくわうく

子わうらい往來等の如く

問 拗音と轉むる者とは

答 エ列の音がウフの音の前より時拗音と轉

むるなり ことは支那語をかり用る時と多く

て元來の國語ふはをくふ

問 國語の者は

答 ケの音をキヨと轉を けふ今日の如くセの音

をシヨと轉を せうと兄の如くエの音をイヨ

と轉を 志ふ醉の如く

問 支那字音の者は

答 エの音をイヨの如くケの音をキヨの如くセの

音をシヨの如くテの音をチヨの如くネの音を

ニヨの如くへの音をヒヤの如くメの音をミヨ

の如くレの音をリヨの如く呼ぶ者ありエウ要
 エフ葉ケウ橋ケフ狭セウ昭セフ妾テウ朝テフ
 蝶ネウ鏡ネフ捨ヘウ豹メウ妙レウ寮レフ獵等
 の如く

問 詞の腰脚あり音の異音あり轉ぶる者は

答 ハ行の音をワ行の音の如く呼ぶ者ありて其數

五あり

問 其一は

答 ハの音をワの如く呼ぶ者 阿はぢ 淡路 かはら

河原はは岩さは澤等なり又オの如く呼ぶこと

あり 阿はぢ 伯耆の如く

問 其二は

答 ヒの音をホの如く呼ぶ者 くひもの喰物 よひ

ばと新治かひ貝こひ鯉等の如く

問 其三は

答 フの音をウの如く呼ぶ者 ゆふがほ夕顔つふ

言等の如くまゐ再とび轉トオの如く呼ぶ者

あり 阿はぢ 扇かきふ通等をり

問 其四は

答 への音をエの如く呼ぶ者 かへとみる 顧を

へ教等の如く

問 其五は

問 其五は

答 ホの音をフの如く呼ぶ者 北はイ多かほ 類等の如し

音便通音

問 通音とは

答 相近き音をむがひて通はして古来より用ゑられたる者にして今二様につかひて孰れを正しとも誤りたりとも爲ざる詞なり

問 其相通ざる詞は

ゆく行とつく行と 魚といを魚と
ゆめ夢といめ夢と われ吾とわま吾と

うさぎ兎とをさぎ兎と えみ夷とえび蛸と相通むるが如し

問 音便とは

答 上古は詞の音便といふ者無かりしを中古支那語をまづ用しより其字音の呼法おのづから我國語にも移りて音便といふ者起りたりをいち字音の長呼の引聲イウンと短呼の口内音との四韻と轉ざる者なり

問 イの音の轉ざる者は

答 キの音なりつきあち朔をついとちさきはひ幸をさいはひさきくさ 三枝をさいくさかみかま

髮搔をかうがいふきがは吹革をふいかう等の

如し又イを加へ長く引きて呼ぶ者は志に四時を志

つと志か詩歌を志いかな等あり

問 ヲの音も轉むる者は

答 マミムハヒへホクの八音なり又ツを加へて長

く引く者あり

問 マの音の轉むる者は

答 あまはり賜を多うばりねはしすを御座をねは

さうだのあまふ宣をのあうぶ等なり

問 ミの音の轉むる者は

答 かみつけ上野をかうづけこみち小路をこうぢ

てみづ手水をしてうづかみかき髮搔をかうがい
多、みがみ疊紙を多、うがみ等をり

問 ムの音の轉むる者は

答 ひむか日向をひうがむむのみ祢多武峯を多う

のみねさむらふ候をさうらふ等をいふなり

問 ハの音の轉むる者は

答 は、き篇をはうきふきがは吹革をいかな等

なり

問 ヒの音の轉むる者は

答 からびつ唐櫃をかろうどほきびと商人をあき

うどおもひて思ヒテをおもうてとひて問ヒテ

そとうて志多がひて從ヒテを志多がうて等を
り

問 へ音の轉むる者ハ

まへつぎみ公卿をやうぢぎみつかへまつる仕
奉をつかうまつる等たり

問 ホ音の轉むる者は

なほらひ直會をならひ衣ほし直衣をならし等
たり

問 ク音の轉むる者は

わらぐつ葉履をわらうづよく能をようわく
悪をわくうさくし冊子をさうしひやくし拍手

をひやうし等たり

問 ウ音を加へて長く引く者を

やかのひ八目をやうかのひよさり夜去をよう

ざり志かして然シテを志かうしてよよばう女

房をよよらばうふ夫婦をふうふ等たり

問 ンの音よ轉むる者は

ミムモニヌリルハヒホの十音たり又ンとムウ
ともニ様ニ轉むる音便り又ンの音を加へて

聲を長く引く者なり

問 ミ音のン音ニ轉むる者ハ

いみへ忌部をいんべきみあち公等をきんあち

かみさし 髪刺をかんだしなみ多涙をまんどと
みて 讀ミテをまんで等なり

問 ム音のン音ヲ轉むる者は

答 ひむかり 東をひんがりほむど 譽田をほんぶ等

たま

問 モ音のン音ヲ轉むる者は

答 ゑもごろ 懇をねんごろをもち 汝をまんぢ等の

如シ

問 ニ音のン音ヲ轉むる者は

答 多よは 丹波をまんむなよは 浪華をまんばなり

ど何ゾをまんごつか 如何ニをいかん等なり

問 ヌ音のン音ヲ轉むる者は

答 みぬま 三瀨をまんまきぬがき 絹垣をまんがひ

等なり

問 リ音のン音ヲ轉むる者は

答 かまを 假名をかんをやかまで 退出をまかんで

くどり 條件をくどん等なり

問 ル音のン音ヲ轉むる者は

答 ろるべし 有ル可シをらんべし ありめり 有ルメ

りをらんめり等なり

問 ハ音のン音ヲ轉むる者は

答 わらは 童子をわらんべといふが如し

問 ヒ音のン音ヲ轉むる者け

答 ゐひとり 主水をいんどおひをひをうる 慮をおひ

んをうる およびて 及ヒテをおよんで志のひて

忍ヒテを志のんでをらびて 並ヒテををらんで

等まう

問 ホ音のヒ音ヲ轉むる者け

答 ほと厚と 殆を厚とんととソムが如し

ン音とウ音とニ様ヲ轉むる音便とけ

問 答 かみぬい 神主をかうぬい かんぬいをみを女を

そうをせんを多かめを 荀を多かうを多かんを

あきびと 商人をあきうどあきんどつかへまつ

る仕奉をつからまつろつかんまつろかぶふり

冠をかうぶりがんむり等の如し

問 シ音を加へて聲を引く者とけ

答 きま 真字をまんをみきみ 南をみんをみぬきて

抽出をぬきんでかぶみ 鑑をかんがみびと 備後

をびんごぶご 豊後をぶんと等の如し

問 短呼の口内音のッヲ轉むる者け

答 キヒチッリフの六音をり 又口内音のッを加へ

て急促々呼ぶ者あり共ニ詳ク前問の答ミムえ

とり参考を可し 七葉 右

延言約言畧言

問 延言とは

答 詞のみトかくして口調のわろき時ニ延べて去らべをとろく整ふる為メ用るなりこれハ五十音圖の縦横ニ通へるおのづからき定まりたまはども初學ニは遠ニさと難ければ今け其詞の一ニを舉げて他日の基礎とすを

問 其詞を示めセ

答 みる見ルをみるくこふる 戀フルをこふらくおらぬ有ラヌをあらなくうつる 移ルをうつらぬ等をり

問 約言とは

答 詞にまりて去らべおしき時ニ約めてと、のゆる者きりこれハ詞の二つ重りてひとつ詞の如くきりたる時ニ第二の詞の上の音がア行の音を了る時ニ多くありきしらげ 差上をき、げおらいろ 炭をとりろかはうち 河内をかふちおはうみ 淡海をらぬみ等をり

問 畧言とは

答 延約の法ニか、はらむして詞のうちニ輕き音を畧きて去らべをきを者をいひきり假令はひきをぎ引刺をひをぎらみひき 網引をらびき志

知られバ然有レハを志かれバ知らウハ明石を
 知らトトヨウラ豊浦をトトヨウヲツウラ松浦を
 知ら等ナリ

小學 日本文典卷一終
 科用



小學 日本文典卷之二上
 科用

姫路 春山弟彦



詞法

問 詞法とは

答 詞の品種を分ちて其性質主用變化等を示め
 法をいふなり

問 詞の品種は共ニ幾類ニ分ツ

答 八種あり第一名詞第二形容詞第三代名詞第四

動詞第五副詞第六後置詞第七接續詞第八感詞

問 名詞とは

答 有生無生の別をく萬物の名目を示す詞なり又

無形の者といへど人意の中ニ事物とを以て
示す詞をいふ

問 形容詞とは

答 事物の形状性質をいふは物體の數目を示す詞なり

問 代名詞とは

答 文章の中ニ同一物名の幾回もいふは是をわづら

はしき時と思ひを勞し考を紊ることよりからしめ

むがとめし其物名を換ふる簡短なる詞をいふなり

問 動詞とは

答 事物の動作を示す詞なり

問 副詞とは

答 動詞の示したる動作形容詞の示したる性質形

状を精密に示さむことを要する時ニ其時限位

地状態等を審定するものを用る詞なり

問 後置詞とは

答 名詞と名詞との關係を示しつるひは名詞と動

詞との關係を示して多くは名詞の位地作動の

時限を審定する者なり又名詞の格を示す者ら

りをもへてこの詞は名詞の後につるを以て後置

詞と名づく又名詞の格を指し示す詞を以て

て指示詞といふ

問 接續詞とは

答 詞を接ぎ句を合せて章句を相接続せしむる詞
まり

問 感詞とは

答 感慨嗟歎を示す詞まり又物の音響を記しつる
ひハ 歌曲の餘韻を記する等をべて不意に發し
て意義なき詞けみまことよ屬を可し

名詞

問 名詞とは

答 天地の間々現はるゝ総ての事物の名目まり有
形の者あり無形の者あり本名の者あり通名の

の者あり他詞より轉ト来る者あり集合してを
る者ありさて又この名詞には數と格とをもつ
まり

問 有形の者とは

答 日 つき 月 ぼし 星 つか 地 ひと 人 けもの 獸 とり
鳥 魚 木 草 梅 松 等の如く形
の有る物の名まり

問 無形の者とは

答 人の想像の中々棋生をる一個の形なき事理を
形體つる者の如くこまふ名を命トある者まり
てこまを想像名詞といふまりこと 事 わさ 業 こと

ろ心 ことは 言語 ち 智 ぢ 仁 ちゆう 勇 等の如し

問 本名の者とは

答 一人マかぎ一物マ属むる名稱をり頼朝秀吉

鎌倉右大臣御堂関白武藏播磨江戸大坂高砂の

松千鳥の香爐等の如し

問 通名の者とは

答 諸物マ涉り或は同類マ相通むる詞をりひと人

くマ國やま山かけ川き木くき草とり鳥けもの

獸等の如し

問 他の詞より轉ト来る者とは

答 動詞らるひは形容詞の轉トて名詞とをる者マ

して六種あり

問 其一は

答 動詞とり来る者マして其動詞の詞尾をイ列又

はエ列の音マ取る者をりををはちゆき行たし

推うち撃らひ達をみ住つる釣たき起たる落の

ひ延うらみ恨たい老た至下え得うけ受やせ瘦

をて捨か祢兼ほめ譽わきまへ辨きえ消かま枯

う急飢い射き着り似ひ乾み視み居等の如し

問 其二は

答 動詞の後マコトらるひけモノといふ詞を加へ

て名詞とをを者をりををはちゆくこと行た

をこと推¹うつこと撃¹うふこと逢¹をむこ
と住¹つること釣¹たくること起¹たつること
と落¹のゆるもの延者もちろるもの用者等の
如く動詞の詞尾をウ列の音²取りてコトモノ等の
詞を加ふるをり又近世はこのコトモノ等の詞
を省きて直¹ゆく行¹を推¹うつ撃とのみいひ
て名詞とををことわり

問 其三は

答 形容詞より来る者¹して¹うか 赤¹うを 青¹うき 浅¹
うか 深¹等の如¹

問 其四は

答 形容詞の後¹にサといふ字を加へて名詞とをを
者¹まり¹多¹かき 高¹サひろき 廣¹サひろき 厚¹さ
さ 深¹サ等の如¹

問 其五は

答 形容詞の後¹にミの字を加へて名詞とをを者¹
り¹あ¹か¹み 高¹ミひろみ 廣¹ミひろみ 厚¹ミながみ 長¹
ミうかみ 赤¹ミくろみ 黒¹ミ等の如¹

問 其六は

答 形容詞の後¹にゲの字を加へて名詞とをを者¹
り¹つ¹と¹げ 強¹ゲれも¹げ 重¹ゲかる¹げ 輕¹ゲ等の如¹
問 集合して来る者とは

答 二個以上の詞の集りて成る者としてこれを集
令名詞といふ其類五つあり

問 其一是

答 二個の名詞相重りて二個の意義を去る者なり
去るはちりめつち 天地 つきひ 日月 松やこ 父子
いもせ 夫婦等の如く

問 其二是

答 二個の名詞相重りある時上の詞は形容詞と
なりて下の詞の性質形状を示る者去りかほみ
づ 河水 いざげい 石橋 きざら 木皿 等の如く又地
名人名を上より置きて其産出の地製造の人をい

うはを者いりをあけちふかくさうちは 深草園

扇 ひめぢかほけ 姫路華 六兵衛やき 陶器 等をり

問 其三は

答 二個の名詞を重ねある時上の名詞の終の音を
轉トて重ぬる者なりこまゝ甲乙丙丁戊の五法
あり

問 甲法の者け

答 エ列の音をア列の音と轉トて重ぬる者なりさ
けや 酒家をさかやかぜを や 風早をかざけやて
まくら 手枕をあまくらひ 稲多 稲田をいさぶを
へいろ 苗代をえけいろわぶち 目輪をまぶちび

えみづ 冷水をひやみづかきをぎ 枯萩をからしを
ぎこまぶか 聲高をこわぶか等の如く

乙法の者は

問 乙法の者は

答 一列の音をウ列の音に轉ぶる者あり
つきよ 月夜をつぐとまぼこ 瓊牙をぬぼこかみ
ぬし 神主をかむぬし等の如く

丙法の者は

問 丙法の者は

答 一列の音をエ列の音に轉ぶる者ありあちけき
帯刀を多てはきいまかき 生垣をいけがき等の
如く

問 丁法の者は

答

一列の音をオ列の音に轉ぶる者ありきのき 木
間をこのまらざき 荷前をのざきひかげ 火影をほ

かげ等の如く

戊法の者は

問 戊法の者は

答 一列の音をア列の音に轉ぶて重ぬる者あり
ろやま 白山をいらやまみのと 水ノ門をみちと
みのくち 水ノ口をみちくち等の如く

其四は

問 其四は

答 三个以上数个の名詞相重せて数个の義をき衣
者きりききけちつきゆきけき 雪月花をきつげつ
せの日月星とうぎのきんぼく 東西南北をきいげ

つぎつと歳月日時等の如し

其五け

問 反對の意義なる動詞なるひけ形容詞の二個重

きて一義をきして名詞とある者なりをきけち

らありはづき 當否 ゆきかへり 往復 何がりさが

を昇降 多かびく 高低 多てとと 縦横 かみしる 上

下等の如し

問 名詞の數とけ

答 單數とは複數の名詞をいふをり

問 單數の名詞は

答 一個の物品を指して其名をいふ時とれを

單數といふをきけち入獸事物の名詞を其ま

と用るをり

問 複數の名詞とは

答 二個以上のおきし物品を指して呼ぶ者ときを

複數の名詞と名づくこの名詞を作るに甲乙の

二法あり

問 甲法の者は

答 名詞の後ニタチトモヲ等の字を加つて複數を

あらけを者なりともあり友ガチきみ多ち君タ

チことども見トモヲともといふ 其許トモ 和多く

しども私ドモ ちむぢら汝等 等の如し

日本文典 卷二 八

問 乙法の者は

答 此等ノ名詞を二介かきねて複数をあらはせる者

をりひとゞく 入々 むらゝゝ 村々 へへゝゝ 家々

等の如し

問 名詞の格とは

答 名詞の互ニ相関しづるひは動詞ニ關係する時

其文の趣旨ニ志多^クがひてゆ^るひけ主^トなり

づひハ客^トなりて其需用ニ適合し多^クる務めを

達する者とを文ニあらはして名詞の格とい

ふ多くは其名詞の後ニ後置詞と名づくる詞を

加へて其格を定むるをり^トを三種ニ分ち主

格物主格 目的格とを

問 主格とは

答 人獣事物の名が獨立して文主となり文句中

あらはるゝ時は^トを主格とをこの文主ニ於

ては自動の状態他動受動の作業等の事を記す

可きなり 人が語る 母が児を育ふ 犬が打

るゝ等の如しさてこの格ニ十體あり

問 其一は

答 名詞が句頭よりりて後置詞を加へて文主

とちる者なりこの格は自動詞と結合する時

あらひは直ニ副詞の前よりり時が多し

年あちまけり 夏来まけらし 人たり 君ち

り ぬきはまはど忍る 兒よく眠る等の如し

問 其二は

カの後置詞を加ふる者なり 生徒が書をよむ

小兒が寝むる 花がさく 風がふく等の如

問 其三は

ノの後置詞を加ふる者なり 花のちる

春の来る 日の出づる 月の入る等の如し

問 其四は

ヅの後置詞を加ふる者なり 梅がかをさる

雁が鳴きさる 思ふまじさる等の如し

問 其五は

ナムの後置詞を加ふる者なり 住所をん入間

の郡みまゝ野の里をりける 母をん藤原をり

ける等の如し

問 其六は

コソの後置詞を加ふる者なり 人こゝ見えぬ

秋こそ来ぬま 我こを行かぬ等の如し

問 其七は

ハの後置詞を加ふる者なり 海は深かり

山けもかり 鳥けまゝ 花はさく 君子は徳

問 たり 朋友は信たり 善は正たり 人は萬物の靈たり等の如し

其八は

問 モの後置詞を加ふる者なり たりぬ降りかぜ
小吹く 酒もほし餅もほし 夏も涼しく冬も
たりぬかたり等の如し

其九は

問 ヲの後置詞を加ふる者なり 君や来し吾や行
きけむ 人やまきたる 鶯やまく 脩身の道
ありや善を行ふたり 梅さくや 月すつや
等の如し

其十は

問 ヲの字を加ふる者なり 君よ来ま 花よさけ
鶯と鳴け等の如しこのヨの字はもと招呼の
感詞をまどる名詞の後よ置きて對話の文よ用るなり

物主格とは

問 物品のち主をたりはをたり作業の人をたり
はをたり事物よ屬せる種類をたりはをたりま
と其分量をたりはをたり総て名詞と名詞との
互の關係を示めを者なり 義家の旗 秀吉の
城 定家の色紙 貫之の歌 正成の戦功
商社の計算 政府の吏務 華族の人 萬里の

海程 數株の松 尺寸の微忠等の如くさてこの格より三體なり

問 其一は

答 〆の後置詞を加ふる者なり 國の民 河の水

八郎の弓等の如く

問 其二は

答 〆の後置詞を加ふる者なり 君が世 汝が家

梅が枝 鴈が音 賤が嶽 鐘が淵 月が瀬

乳母がルチ等の如く

問 其三は

答 後置詞を加へてこの格をわらけを者なり

〆がは谷川 中つば松葉 きざら木皿 いげ

石橋等の如く

問 目的格とけ

答 動詞より屬する名詞よりて其名詞が動詞の作

動の目的となる者なり假令ば 小児が書をよ

む 書生が學校より恭する等の文より於て書らるひ

は學校といふ名詞がよむらるひは恭するといふ

動詞の目的となる者なりこの格より四體なり

問 其一は

答 二の後置詞を加ふる者なり 天皇陛下は東京

よりよりやま 人民は君長より順ふ 地球は一畫

夜は一轉を等の如し

問 其二は

答 への後置詞を加ふる者なり ねきは東京へ上

らむ ねきは近日大阪へ来らむ 君は長寄へ

行かむとして廣嶋といふを等の如し

問 其三は

答 への後置詞を加ふる者なり 小児が書をよむ

善入は徳を脩む 天は人を助く 等の如

し

問 其四は

答 ヨリの後置詞を加ふる者なり 鶯は谷より出

づ 鶏は曉より鳴く 君は東海道より江戸へ

ゆく 吾は中山道より京都へ上らむ等の如し

形容詞

問 形容詞とは

答 名詞のつらばしふる動植事物の性質形状を示

めたる者として本来の者なり他の詞より轉て来

る者なり詞尾を加ふる者なり助動詞を加ふる

者なりをへて名詞の前より置くを常とて名

詞の後より置きて動詞の如く用る者なり數量を

示す者なり順序を示す者なり比較の級を示す

者なり

問 本来の者とは

其詞の性質もとより形容を摸し出さることを以て主旨とせし者にしてこそは他の詞も變むる者と變ぜざる者との二種なり

問 他の詞も變ぜざる者とは

まぢけ 真竹 小野のを 三芳野のみ 蕤のさ 此をらばると名詞を鄭重し

答

ひは愛翫の意をほらはまんとせし時を冠らしむる詞にして詠歎の趣味を表する者多きは多とを冠詞ともいふ可く感詞ともいひて可

問 他の詞も變むる者とは

ほか赤いろ白くろ黒 辛等は本来の形容詞なり

問 他の詞より轉ト来る者とは

答 本来の名詞何れもハは動詞より来りたる名詞を

其マ、一詞尾を加へて形容詞となりて用

る者なり其法集合名詞の第二と同じ ひば

火箸 てつびん 鐵瓶 ちやわん 茶碗 くひもの 喰物

よみほん 讀本 等なり

問 形容詞の詞尾とは

答 キケキシキラシキ等なり形容詞の變畫圖をみ

よ

問 キの詞尾は

答 こまは心とクシキササケレと轉トて形容詞を

助くる一介の活語をりるのキニ轉ざる時は名

詞の前ニ適合しシるハはケレニ轉ざる時は

名詞の後ニ適合して其形容を何らはくニ轉

ざる時は形容詞何れハは動詞の前ニ位して副

詞となりサるハはニニ轉ざる時は名詞とな

るをりさてこの時の詞尾を用るニ甲乙の二法あり

問 甲法の者は

答 本来の形容詞ニ加ふる者なり あをき 青キ

あかき 赤キ よき 善キ こき 濃キ うたき 薄キ あか

たかき 高キ ひろき 廣キ おろき 繁キ ぬるき 温キ あま

かたき 固キ にくき 憎キ いふき 痛キ なごり 等なり あま 副詞

二加つて形容詞の如く用ゐる者あり
ごとき如
キをき無キ等の如し

問 乙法の者は

答 シ終りたる形容詞は動詞に加ふる者
たり
よろしき宜きうつくしき美き
樂キ
かをーき悲キ等たり

問 ケキの詞尾は

答 こまはケクケシケキケサと轉じて形容詞を助
くる詞あり
はるけき遙ケキ
等
の如し
あづけき静ケキ

問 シキの詞尾は

答 シシキシケレシクシサと轉用する詞にして形

容詞副詞動詞等を受け名詞の前は後
りりて其形容を示す者あり
こまは甲乙丙の三
法あり

問 甲法の者は

答 動詞に加つて形容詞とまを者なり
きはがしき

噪キ
うまかはしき疑キ
このましき
好キ
おろろ

一き恐キ等の如し

問 乙法の者は

答 本来の形容詞はひは名詞のおまし詞を二介
かさねて詞尾を加ふる者なり
まがしき

永々シキ 二ぎこまーき 賑々シキ ことごとくーき
 事々シキ 物のととーき 物々シキ はまどととーき
 晴々シキ 等たり

問 丙法の者は

答 副詞に加ふる者あり

はあはあーき 甚シキ いか

いーき 如何シキ 等たり

問 ラシキの詞尾は

答 ラシキの詞尾は

詞に加て其恰好の風致をあらはる者あり

をところらーき 男ラシキ をむちらーき 女ラシキ

からいらーき 可愛ラシキ 等たり

形容詞の變畫圖

	ケキ	キ		
		乙法の者	甲法の者	
甲法の者				
好まーき	静けき	美ーき	赤き	名詞の前 適合する者
好まー	静けー	美ー	赤ー	名詞の後 適合する者
好まーく	静けく	美ーく	赤く	副詞と なる者
好まーさ	静けさ	美ーさ	赤さ	名詞と なる者

ラシキ		シキ	乙法の者	賑々ーき	賑々ー	賑々ーく	賑々ーき
		丙法の者		晴々ーき	晴々ー	晴々ーく	晴々ーき
可愛らーき	男らーき	如何ーき	甚ーき	如何ー	如何ー	如何ーく	如何ーき
可愛らーき	男らーき	如何ー	甚ー	如何ー	如何ー	如何ーく	如何ーき
可愛らーき	男らーき	如何ー	如何ー	如何ー	如何ー	如何ーく	如何ーき
可愛らーき	男らーき	如何ー	如何ー	如何ー	如何ー	如何ーく	如何ーき

問 助動詞を加ふる者とは
 答 ナルタルの二詞より助動表甲第四轉と参考を
 問 ナルの助動詞を加ふる者とは

答 四段活用の助動詞よりナラナリナルナレと
 轉ざる詞より其形容をあらはる者より甲乙の二
 體あり
 問 甲の者は
 答 本来の形容詞より加ふる者あり 黄なる色
 こすやかなる花 かゆくなる人 じぎやか
 なる家等の如く
 問 乙の者は
 答 名詞よりひは支那語より加へて形容を示る者
 あり 東京なる人 播磨なる女 忠義なる臣
 孝順なる子 聡明なる君主等の如く

問 タルの助動詞を加ふる者は

答 ラ行四段活用の助動詞にして其形容をけらけ

る者一甲乙の二體あり

問 其甲は

答 動詞の詞尾をイ列の音がエ列の音が取りて

この助動詞を加ふる者なり 學びある人

よみある書 落ちある菓實 老いある男

流きある水 やせある狗等の如し

問 其乙は

答 支那語の形容詞に加て用ふる者なり 湯々ある

洪水 四門穆々あり 吻々たる鹿鳴 窈窕と

る淑女 参差ある苜蓿 桃の天々たる其葉蓂

々たり等の如し

問 名詞の後置きて動詞の如く用ふる者とは

答 シケレシケレの詞尾を加ふるわらひはナリ

タリの助動詞を加ふる者ありをまはち 心は

清し 人ころよけき 花こそ美しけき 道は

るかぎり 緑竹猗々たり等の如し

問 數量を示す者とは

答 形容詞の中ら數量をけらける者なりことを數

形容詞といふ共ニ種々分つ一を定數といひ

一を不定數といふなり

問 定数とは

答 名詞の前よりいは後よりりて其分量を精しく

示す詞よりして原数の者より轉來の者より合併

の者よりりて其用法もちと一をらむ

問 原数とは

答 ひとつ 一ふとつ ニみつ 三よつ 四のつ 五むつ

六ちよつ 七やつ 八このつ 九よを 十も 百ち

十よちづ 萬ゆるひは 一いち 二よ 三さん 四一 五

ご六ろく 七しち 八はら 九く 十ドや 百ひやく 千

せん 萬まん 等の根原の数をいふなり

問 轉來の者とは

答 ソッヂホ等の字を加へて原数より轉ト來る者

ちりちをはち みる 三十よち 四十むろち 六

十のほ 五百やほ 八百等の如し

問 合併の者とは

答 原数を合併して成る数をいふなり 十一トや

のち 二十三るトやさん 六十五ろくドやど 百五

十四 ひやくどトやい 等の如し

問 定数の用法を示せ

答 名詞の前よりる者は甲乙丙の三法を分つ其名

詞の後よりる者は直ちより名詞の次より位して別

る説らふしを要きむ

問 甲法は

答 直ち又名詞の前より置く者きりたまはち ひと

つ 一星 ふとつ ふち 二丸 みつば 三葉 よつ

ド 四辻 ちひろ 千尋 よろづ よ 萬世 等の如し

問 乙法は

答 ツの字をけおきて名詞の前より置く者きりたまは

はち ひと まぢ 一線 おま おや 父母 み 一 ま 三品

ま く さ 七草 こ の あ び 九回 等の如し

問 丙法は

答 ノの字を加へて名詞の前より置く者きりたまは

ち お と つ の い へ 二家 よ つ の は ま 四出 花 等の

如し又其名詞が人品きり時は り い ろ ろ ひ は タリ

の字を加へるきり ひと り じ 一 子 ふ と り の と

も ニ 友 み と り の ひ と 三 人 等の如し

問 不定數とは

答 定限きり大概の數を示す詞きりたまは 四 種 の

り

問 其一は

答 ひろく総數を示す詞きり み を 皆 お の ろ ろ 各

い ろ 或 い く ば く 幾 何 ろ く ば く 若 干 等の如し

問 其二は

答 多分きりたことを知るといへども其定限をい

どる時₁用₃者₂を₁を₁け₁ち₁ ねほき多₁とい₁
へ₃詞₁を₁り

問 其三は

答 其數の少₁分₁き₁る₁こと₁を₁知₁る₁とい₁へ₁ど₁も₁い₁か

1定₁や₁ら₁ぎ₁る₁時₁用₃詞₁を₁け₁ち₁ ち₁く₁
き₁き₁ ₁わ₁づ₁か₁き₁る₁ 僅₁十₁ル₁ ₁つ₁さ₁ ₁か₁ ₁苟₁等₁の₁如₁い

問 其四は

答 數量の分₁明₁き₁ら₁ぎ₁る₁時₁問₁か₁く₁る₁詞₁を₁け₁ち₁を₁を

は₁ち ₁い₁く₁ 幾₁ ₁い₁く₁ら₁ 幾₁ ₁い₁く₁つ ₁幾₁ ₁等₁の₁如₁い

問 順序を示₁を₁者₁とい₁は

答 事物の階₁級₁の₁逐₁次₁進₁退₁を₁示₁を₁詞₁を₁

して甲乙丙丁の四法₁を₁り

問 甲法の者は

答 定數の後₁の₁字₁を₁加₁へ₁て₁順₁序₁を₁ら₁は₁を₁者

を₁り ₁ひ₁と₁つ₁め ₁ふ₁も₁つ₁め ₁十₁一₁め ₁百₁二₁十

め ₁三₁百₁五₁十₁三₁め₁等₁の₁如₁い

問 乙法の者は

答 支那語の數₁字₁を₁用₃法₁を₁して₁定₁數₁の₁前₁の₁第₁の

字₁を₁加₁ふ₁る₁者₁を₁り ₁第₁一 ₁第₁二₁等₁の₁如₁い

問 丙法の者は

答 定數の後₁の₁字₁を₁ら₁は₁は₁番₁目₁の₁字₁を₁加₁ふ₁る

者₁を₁り ₁一₁番 ₁二₁番 ₁三₁番 ₁一₁番₁目 ₁二₁番₁目

等の如し

問 丁法の者は

答 定数の前より第一の字を置き後より第二番の字は

番目の字を加ふる者なり 第一番 第二番

第三番目 第四番目等の如し

問 比較の級とは

答 土地人物等の形容に就きて此彼二者の比較を

示す者をつかきこの法甲乙の二つなり

問 甲法の者は

答 二物相比して其一の者が他の者の上級より

ことをいふはを者として形容詞の前より

字を加ふる者なり 櫻は梅より美しくき花なり
金は銀より大なる價直なり 人は禽獸より尊し等の如し

問 乙法の者は

答 一物をして同類の他の物より獨をいふ事

を示す時おほひは劣りとする事を示す時か

形容詞の前よりモトモ最ハナハダ甚ゴク極シゴ

ク至極イタリテ至テ等の詞を加ふる者なり

東京は最大なる都府なり 楠公は甚忠義なり

人なり 鼠はいよりて小なる獸なり 美濃紙

はごく強き紙なり 尊氏はごくわき人なり

の等の如し

代名詞

問 代名詞とは

答 一の文章の中より於て同く名詞をいばると重複
て出た時け其行文煩雜よりて混亂を生むるこ
とあり故より一種簡約なる詞を以て其名詞より代
て用る者こそを代名詞といふなり其類五より
て名詞と同トく数と格とをもつ者なり人代名
詞物主代名詞疑問代名詞復歸代名詞指示代名
詞等なり

問 人代名詞とは

答 人名より代ふる詞よりて第一人稱 第二人稱 第三
人稱の三種とを

問 第一人稱とは

答 對話よりりて其演説をる人の名より代ふる詞より
て己の名より代ふる者なりこそは單複の二數
あり

問 單數の第一人稱は

答 我 わき 我 わ多くし 私 やつがま 僕 こち 此方 せ
つーや 拙者 ぼく 僕 等なり

問 複數の第一人稱は

問 第一種の者は

答 近き所より者をさして言ふ時用る代名詞

なり こ 是 こ 是 等よりて こ は 人 なり こ

を 父 といふ 等の如し

問 第二種の者は

答 遠く隔とりたる人をさして言ふ時用る詞を

り か は 彼 ら は 彼 ら と 彼 方 等の詞よりて

か が 書 を よ む を き け ら は 官 吏 なり 等の

如し

問 第三種の者は

答 近き者と遠き者との中間より者をさして示

る時用る代名詞なり ら 其 ら を 其 等よりて

を は 其 子 の 母 なり を は こ を よ き 人 なり 等

の如し

問 第三人稱の三種の用法を示せ

答 義経は頼朝の弟よりて義朝の子なりといふ文

を代名詞より代て こ を 第一種 は を 第三種 の

弟よりて か を 第二種 の 子 なり といふ が 如し

問 物主代名詞とは

答 物品の持主をあらはる時其持主より代ふる詞

よりて 人 代 名 詞 より あら は る ひ は が の 後 置 詞 を 加

て物主格を作るなり

問 疑問代名詞とは

答 對話に於るひは文章に於て其きりて説き出さむ
とをる者の疑いくいで分明に知まざる事物を
尋ね問ふ時其事物の名を代へて問ひかくる詞を
まことまは五種なり

問 第一種の者は

答 まは 何といふ詞なりこまは事物の性質品類等
の全く知まざる時に用る者なり

問 第二種の者は

答 まは 誰といふ詞なりこまは人なることを知り
て其名の知まざる時に用る者なり

問 第三種の者は

答 まは 孰といふ詞なりこまは同類に於るひは
一局部に於て其大畧を知り得るまは其まは
所の一物の定めをらざる者を問ふ時に用る詞
なり

問 第四種の者は

答 まは 何時と言ふ詞なりこまは時限の知まざる
時に用る者なり

問 第五種の者は

答 まは 何處といふ詞なり何處等の詞なりこまは位置
の知まざるを問ふ時に用る者なり

問 復歸代名詞とは

答 人獸事物の作業其動作をる者をもはる文主より復歸をる時を用る者よりて共々二種のり

問 其一は

答 其のま己みづから自等よりてとまを本来の者とを子ある者は其父母の己を教ふることを

好むは其務の一なり 人の虚言をかふるはみ

づから欺くをり等をり

問 其二は

答 我をむむぢ汝等よりて人代名詞の第一人稱第二人稱より来る者なり 我は我を愛む

問 指示代名詞とは

答 名詞の前よりりて手指を以て指をが如く事物を示す時を用る詞をり其用法形容詞より同一故にやと指示形容詞と名づく其類四のり

問 其第一の者は

答 この此の其かの彼等の詞をりとはは一物一事を分明に指し示す時を用る者よりてこの人をその所より居らしめてかの事を學ばしめよこの書生はかの學校より在りてその業を勉む等の如し

問 其第二の者は

答 示る 或と言ふ詞をりときは事物を廣く不分明

なきし 示る時より用る者より 示る人示る所等

の如し

問 其第三の者は

答 示るのとき 斯ノ如キ 示るやうなる 斯様ナル等

の詞ありときは事物の性質形状等をきし 示る

むと長る時より用る者より 示るのとき 君子

示るやうなる時等の如し

問 其第四の者は

答 示るべきの 彼レ此レノ 示るは 示る此所彼所

示るの詞をりときは各種の事物を一度より

示る時より用る者より 示るべきこと等の事 示る

示るこの人等の如し

小學
科用
日本文典卷之二上終

